

廻村と表彰

念願の桜町を訪ねました。栃木県真岡市の一地域です。陣屋が残り、報徳神社や資料館が整備されています。江戸時代は、小田原藩主の分家である宇津家の領地。17世紀には収納米が3,000石、世帯数が433戸ありました。ところが、二宮尊徳が着任した1823年には収納米900石、世帯数156戸と激減しています。農民が逃散し、田畑の手入れが行き届かず村が荒廃。それを立て直したのが尊徳仕法です。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」

尊徳の出自は農民。幼い頃に両親を亡くし、兄弟は別々の養家で育っています。当然、子ども時代からその家の労働力です。空き地に菜種を播き、菜種油をつくって夜に勉強した、荒れ地を耕し、廃棄された苗を植えて米を収穫した。そんな、小さな工夫を積み重ね、20歳代で家を再興しました。

その努力が藩に認められ、尊徳は、服部家(小田原藩家老)の家政改革を任せられます。農民が、プロフェッショナルとして武士に取り立てられたわけです。その改革に成功し、次に与えられた仕事が、桜町の再興。37歳でそれを命じられます。尊徳は家売り払い、退路を断って赴任します。任地の陣屋は4室しかありません。生家よりも小さい陣屋です。覚悟を決めての赴任だったのでしょう。その後26年間もの間、桜町で過ごします。

赴任した尊徳は、毎日「廻村」を行います。



▲栃木県真岡市にある桜町陣屋跡

村内を歩き回り、農民に声をかけて、村内の実情を把握します(桜町は低地なので水の流れなどもよく観察したはずです)。周囲が20km強の農村ですから、隅々まで見回ることができ、短期間で村の実情に詳しくなっただしょう。人についても、自然についてもです。その上で、勤勉に働く農民を表彰し、副賞の鍬を与えます。村人の向上心を刺激できるような人物を選んだはずです。

もう一つの手段は、村人による「芋こじ」です。泥のついた里芋を水の中でかき回すと、お互いがこすれ合って泥が落ち、一皮むける。つまり、村人が寄り合い、互いに話し合い、連帯責任を負うことによって、みんなが一皮むける。芋こじによる学習抜きでは、村の再興は持続できない。それが尊徳の学習論です。

近年、不正会計やデータの改ざんなどの不祥事が目立ちます。他者が決めた基準に合わせて他律的に動き、基準にさえあっていればそれで良いという考え。やがて無茶や不正をする。連帯責任を担う能力を育てる場が不足していると感じた桜町でした。

(MBO実践支援センター代表)

